

「今日の説教、聴き手のために」 2008/6/1 明治学院教会(116)

(このプリントは毎週作っているものです)

岩井健作

「神の目、親の目、子供の目」

岩井健作

マタイ福音書6章22節-23節

「目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい」(22)

- 1、「目が澄んでいれば」は、イエスの「山上の説教」(マタイ5章から7章)の中にある。「山上の説教」の根底は、「天の父」の我々への徹底した信(真実、愛、恵)である。例えば「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」(5:45)という言葉が、底知れない信の深さ、確かさを表している。
- 2、「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身は明るい」という言葉は、その「天の父」への応答が「目」で表現されている。「澄んでいる」(ハブルース)は、単純な、純粋な。根本は「単一」そして「全体」を意味する。特にマタイは倫理的意味を強調し、無条件的な「あれか、これか」を表す(目の話を「神と富とに兼ね仕えることは出来ない」[24])との話しに繋げる)。パウロは名詞でこの語を使い、献金に関して3度用いている(2コリ9:13他)。「惜しみなく」と訳されている。
- 3、「天の父」への全き信頼を、子供の存在で表したのはイエスが幼子を招かれたという話(18:13f)である。「目が澄んで」という言葉は、幼子の目を連想する。画家岩崎ちひろさんは、3歳と4歳の子の目を描き分けた。母親が後ろ姿で髪だけ描かれ、子供が母の肩越しにこちらを向いて赤いカーネーションを持っている絵がある。母の目は描かれていない。子供の目が母の愛情すべてを語っている。
- 4、親の目はそれ自身では存在しない。子供の目に引き出されて、親の目がある。幼稚園園長の経験で子供から親の目について教えられた。①、子と向かい合った目(二人称)。②、親の責任の眼。状況全体を見る目。(三人称)。③、親の内省の眼。祈る目(一人称)。
- 5、3歳で57歳の園長に出会い、幼稚園からの青年前期を過ごし、念願の医学部入学をしたからといってかつての園児、K、M君が鎌倉を尋ねてきた。17年間、親をはらはらさせて、親からいろいろまなざしを引き出して成長してきた。今年のクリスマスには受洗しようと思っているとふと語っていた。教会や幼稚園の歩みを見守る「神の目」を感じた。彼の目はひたむきで「澄んで」いた。全き信頼のあるところで私たちは目の澄んだ生き方をすることが出来る。